

これは受け手の構えに帰因すると思われる。

精薄脳波の分析的研究 (第2報)

——正常者脳波の光及び音刺激による駆動の研究——

東京学芸大学 齋藤義夫・○内山武治
東京教育大学 松野 豊

我々は先に精薄脳波の概観を報告したが、これを追求するためにはその対照としての正常者脳波の諸特徴を重調解析により駆動脳波において把握せんとした。また実験装置の関係上、周期的音刺激を主として用いる方針なので、先ず光と音との脳波駆動の様相を周波数特性曲線によつて比較検討した。その結果 (1) 周期的音刺激は光刺激より若干弱い、概ね同様な脳波駆動力がありその刺激として有効なこと、(2) 10% 付近に顕著な峯型を形成すること、(3) 各頭部脳波の被駆動性は (イ) 後頭、次に (ロ) 前頭及び頭頂、(ハ) 側頭の順になること、(4) 暗室内開眼時の被駆動性は音刺激は大差なく、光刺激は顕著に減少すること、刺激開始直後よりその被駆動性の時間的経過を見ると音刺激は漸次的な上昇、光刺激はそれより長い潜時を以て上昇し、何れも周期的に消長していること等の成績が見られた。

精薄脳波の分析的研究 (第3報)

——正常者の各種意識状態および化学物質
投与時の脳波駆動の研究——

東京学芸大学 ○齋藤義夫・内山武治・
東京教育大学 松野 豊

精薄脳波を概観する内に、正常者の特殊な状態の脳波像と精薄のそれとが近似することを見出したので、正常者の特殊な場合の脳波を重調解析によつて追求した。その結果 (1) 各種意識状態即ち (イ) 覚醒時の安静閉眼時のスペクトル密度は $10^0/\%$ に頂点を持つ峯型となり、(ロ) 精神活動時には α 波の顕著な抑制となり (β 波の増強はない)、(ハ) 入眠→深睡眠になるに従い顕著な徐波の増強 asymmetry, disrhythmia 及び浅睡眠時の速波の出現があること、(2) 深睡眠時の駆動脳波は δ 波に第1峯、 θ 波に第2峯を持つ徐波優位の多峯性となること、(3) 化学物質投与においては (イ) カフェインは顕著に被駆動性を増すこと、(ロ) GABA は健康成人には影響のないこと、(ハ) 酒精は一般に被駆動性を低下せしめるが、特に音刺激において著しいことなどがわかった。

音声言語刺激にたいする定位性血管運動反射と 血管運動条件反射

——正常児と精薄児の比較研究——

東京教育大学 ○松野 豊・東京学芸大学 藤原喜悦

血管反射にあらわれる定位反射を指標として、精薄児の定位反射活動の特質を明らかにし、同時に定位反射活動の活潑さと条件反射活動の活潑さとの関係を調査する。記録には光電脈波計を用い、頭部と手指の脈波を同時に記録。または指先の PL と手掌の GSR の同時記録を行なつた。強化刺激は皮膚電気刺激であつた。研究の結果つぎのことが明らかにされた。1) 音声言語刺激にたいする精薄児の血管反射は不活潑であり、容易に消去する。2) 精薄児のばあい、血管運動条件反射の形成には一般に多くの強化を必要とする。この条件結合が形成され

ても、それを正しく言語化するためにはさらに多くの強化を必要とする。3) これにたいし正常児では結合の形成に2~4回の強化を必要とするだけであり、結合の形成とともにただちに実験事態を言語化する。5) 言語化された条件結合は安定しており強固であるが、さらに強化を反復していくと、条件刺激にたいする血管反射は消失する。

高知能者の選別の可能性について

京都大学 苧阪良二・○奥野茂夫

今世紀の初頭、Binet, A. が効果的な知能検査尺度の構成に成功して以来、知能検査はその実用的有用性のため著しく発展し、被験者の年齢や特殊性(盲人・ろう人等)に応じて検査が作成されている。しかし、従来の知能検査はいずれも単一検査でもつて、秀才に近いものから精神薄弱児に近いものまで測定しようとするため、どうしても尺度の両端附近で測定精度が著しく低下するという欠点がある。この欠点を補うため、われわれは始め全員に NX (普通者用) 知能検査を実施し、その標準得点分布の両端附近の者は別にこれを集め、FX (劣等者用) 知能検査または SX (優秀者用) 知能検査を試みるという二重形式を計画した。今回はまず SX 検査作成の理論的可能性及び基本的立場及び計画を発表し、諸賢児の御批判を仰いだ次第である。

高知能者群の特徴の分析

京都大学 倉石精一・○住田幸次郎

今回は分析の始めとして、高知能者用の知能検査制作の基礎資料としてどういふ検査問題で高知能者達は点をかせぎまたどんな特徴があらわれるか、ということを知る必要から、一応京大 NX 15- (サブテスト12) に限つて、通過率、無応答数、誤答の反応内容といった項目分析を試みた。資料は約400名の大学生より SS70 以上72名、SS61 以上100名、標準化の際に使用した高校生全サンプルより100名を抽出した。この分析の範囲からいえることは、一般の者と高い知能の者の差が大きいのは解決に Speed を要する様な Verbal Test が、上知能群の中での能力の識別には試行数の差よりも誤答差が通過率に響く結果を生じている空間的能力をみるテスト、Reasoning 的要素を多く含んだ N, V 系統のテストが有効とみられる。また、この様な多肢選択テストでは誤答の特定選択肢への集中率は知能程度の上昇に伴つて増加した。

これらのより厳密な検証と、知能のプロフィール・パターンの分析とが次の課題として残る。

知的優秀児の特性に関する基礎研究 (第5報告)

——親・教師の報告による性格特徴について——

東京家政大学 森 重 敏

目的：従来試みている基礎研究の一環としての続報 V。今回は優秀児(G)の「好ましい」性格特徴を普通児(N)との比較において検討する。

方法：東京都内の一小学校(港区立三光小)1~6年全児への集団知能検査(田中B式)で SS 65以上45人(男30女15)を選んで WISC を試み、IQ 130以上の